

## ”Second Life, or, Final Stage of Life をどう生きるか”

### 1. 大学時代から定年までの人生

#### ① 名古屋学院大学・第一期交換留学生、日米両国で学部、大学院での学修経験

私は、1967年、大学4年次に第一期交換留学生として、姉妹校 Alaska Methodist University（現在、Alaska Pacific University）へ留学を致しました。当時のアメリカは、いまだ自由の国、夢の国でしたが、日本の大学と比べて、学業への取組と厳しさは、特筆すべきであり、ある意味、目から鱗でした。母校の名古屋学院大学を一時休学し、姉妹校へ編入し、二年後、Sociology専攻で無事卒業しました。卒業後、一端日本に帰国し母校に復学ののち、残りの単位を修得し、経済学士を取得しましたが、2年間のアメリカ留学では、自己の確立は覚束なく、再度、アメリカの大学院進学を志し、州立アラスカ大学（アンカレッジ校）でカウンセリング心理学を専攻しました。

#### ② 日米教育委員会での仕事について

アメリカの大学院在学中、東京の日米教育委員会（フルブライト奨学金）から、初代の教育カウンセラー募集があり、指導教授のアドバイスの元、応募し、見事合格しました。その為、一端アメリカでの大学院を休止し、フルブライト東京オフィス（赤坂見附）で勤務を始めました。フルブライトでは、年間2~3万件のアメリカ留学希望者に、個人カウンセリング、グループ説明会、電話・手紙での相談、そして、大手企業からの企業派遣留学など、学生、社会人、教員、企業の人事担当者、日本政府からの相談など、15年間に亘り、アメリカの大学教育に関する情報提供と教育相談に多忙な日々を過ごしました。また、在職中に上智大学大学院で二度目の大学院に通い、比較文化研究で修士号を修得しました。

#### ③ 名古屋学院大学・教員として奉職

40代半ばで、欧米の大学との交換留学プログラムを大幅に拡大するため、母校では、諸外国からの留学生に対して「留学生別科：日本研究プログラム」を創設し、その要の担当教員として依頼があり、以後、母校の教員として奉職しました。

大学での教員生活が始まり、数年後には経済学部に移籍し、新たな担当教育科目で専門科目の教育を始めました。大学では、海外の交流協定校の開発、派遣留学生の教育、受け入れ留学生と地域社会との連携など、教育の総てに関わり、母校の国際教育交流プログラムの中心的担い手として、定年までの25年間、国際交流委員長を務めました。

大学での担当科目は、比較文化、比較言語文化など、自身の学問的背景である経済学、社会学、カウンセリング心理学、比較文化心理学、比較教育学をベースに教鞭をとりました。

#### ④ 学会活動と研究活動

学会活動としては、異文化コミュニケーション学会を創設し、また、国際的な日本研究の関連学会に所属し、国内での学会活動とヨーロッパ中心の日本研究活動で、アメリカ、ヨーロッパを中心とした、数多くの学会活動に参加しました。

学外の学術交流に関しては、日本学術会議の連携会員として、国際的な世界社会科学団体連盟の会長も務めま

した。また、教員生活の後半には、一年間の研究留学制度により、オックスフォード大学 (St. Anthony College) とウィーン大学で上級研究員として研究生活を行った事は、自身の人生で特筆すべき経験でした。

## 2. 定年退職後の暮らし

### ① 定年後の人生の意味について

名古屋学院での教員生活と国内外の学会と研究活動は、70才の定年ですべて終了しましたが、人生初めての定年生活をどう過ごすのか、様々の事を考えました。その中で辿り着いた、一つのキーワードは、“人生初の自由な時間を持つことができる”と言うことでした。

### ② 定年から今日まで行って来たこと

★ **教育活動の継続：** 定年後、最初の一年間は名古屋学院大学の「留学生別科の担当科目：Japanese Social Behavior、日本人の社会行動、英語での講義」を継続担当し、軽井沢から名古屋まで片道350キロ+の距離を往復しました。

★ **軽井沢での生活：** その後、ジャングル状態の軽井沢の別宅350坪との闘いが始まり、庭師、大工の棟梁を目指し、ひたすら肉体労働に励みました。その間、家族と孫へのサービスの為、息子達2家族との“夏休みの軽井沢ファミリー合宿”を行うため、宿泊用に二棟増設しました。また、地元軽井沢での人の輪を求めて、歴史ある[軽井沢シンフォニック・コーラス]へ参加し、軽井沢の名門大賀ホールで、音楽発表会を経験しました。

期間限定 You Tube: “フォレストコンサート、2024, 04-21、後半映像”

[https://youtu.be/bfXpqZ1k4qM?si=5L1cuxA\\_xGPbloZC](https://youtu.be/bfXpqZ1k4qM?si=5L1cuxA_xGPbloZC)

★ **二拠点生活：** 大都会東京の自宅と軽井沢の田舎暮らしの生活を継続中です。

★ **専門分野の研究活動：** 友人と伴に創設した「多文化関係学会、Japan Society for Multicultural Relations」の学会員活動だけは継続中ですが、一昨年からは、新たな研究活動への参加が始まりました。「平和社会学研究・創刊号」に平和エッセイ“心の中に平和の砦を”を寄稿しました。

★ **ISAKの学生との交流：** 貴重な人材の宝庫であるインターナショナル・スクール ISAKの学生達とボランティアとして、ささやかな交流が始まりました。100年の文化を培った軽井沢に住む人々、地域社会との深い関わりを持つことは、日本文化と異文化の多様な交流を促す意味で、最も有意義な国際教育交流の機会提供であると思います。

## 3. 残りの人生への願い

### ① 健康寿命をどう持続するか、出来るか

定年後から今日までの9年間、軽井沢の高原（海拔千メートル）で、自由気ままに庭作りと家の増設（350坪のジャングル）に励み、労働の喜びを味わってきましたが、やり過ぎた労働で、本年1月に脊椎間狭窄症の手術（7時間に及ぶ手術）を受け、現在その後遺症と闘い中です。

## ② これまでに見送った掛け替えのない大切な人達への思い

来年は、80才の高齢者になり、これまでに逝去した父母、兄弟、先妻、義父、友人への追悼と自身の死への心構えを深く感じる心境になりました。

## ③ 心に深く刻まれた思い出を大切にすること

人生を変えたアラスカ留学、二度のアメリカ留学、フルブライトでの仕事、学会と研究活動で訪れた世界の国々（アメリカ、ヨーロッパ、アジア）、上級研究者として過ごしたオックスフォード大学とウイーン大学、新しく開拓したアジア（タイの国）の大学との教育交流、最も大切な家族との別れ（死）、老後の暮らし、衰え行く体力、三か月間の世界旅行など、これまでの人生で得た、深い心の中が思い出と共に、過去と現在と Final Stage of Life を、Embrace する心境であります。